

<<口頭発表>> (3月10日 10:00-10:30)

【6号館2F 6201号室】

マクロ・コンテキストはいかにミクロな相互行為に関連づけられるか
—社会記号論系言語人類学の立場からの考察—

李 址遠

本発表では、状況に埋め込まれた具体的な言語使用（ミクロ的事象）と、それを取り巻く社会や文化といったコンテキスト（マクロ的事象）がいかに接合され得るかを、社会記号論系言語人類学の理論的枠組みに基づいて考察する。まず、その枠組みが、ミクロとマクロの区別そのものを乗り越えるために近年社会言語学に導入されたスケール（scale）の概念を統合し得ることを論じ、次に、その枠組みに基づいて、学校歴というマクロ的体系に関してなされた会話データを分析する。これを通して、本研究では、マクロ的事象が、相互行為の参加者たちによって、彼（女）らの視点を反映するものとして喚起され、相互行為上の目的のために利用され得ること、そのため、どのようなマクロ的事象を喚起させるか、それにどれほどの関与生を持たせるかには常に交渉の余地が存在すること、したがって、マクロ的事象は決して一様ではなく、様々な形を取り得ることを示す。

<<口頭発表>> (3月10日 10:35-11:05)

【6号館2F 6201号室】

落語におけるマクラから本題への遷移ストラテジー

矢島 のは菜, 岡本 雅史

本研究では、落語家がいかなるストラテジーでマクラから本題への遷移を実現しているのか、そしてなぜ本題へ入ることを明確に聴衆に示さないのかを考察する。分析資料として、7人の落語家による落語の映像データ30本を用い、ELANによって「発話」「間」「声色」「声の高さ」「声の大きさ」「発話速度」「動作」「視線」を分析した。その結果、特にポーズ長や声色等においてマクラ部分と本題部分で顕著なモード変化が見られたが、全てのモダリティが本題に入る瞬間と同時に変化しているわけではなく、どのモダリティのずらしを行うかは落語家ごとに異なっていることが判明した。このことから、落語家はこうしたモダリティのずらしによって本題への自然な遷移を促し、聴衆を「徐々に世界に引き込む」ことを実現しつつ、マクラにおいて観客へ直接的な語りかけを行うスタイルで高めた観客の集中力を本題に入っても維持し続けていることが明らかとなった。

<<口頭発表>> (3月10日 11:10-11:40)

【6号館2F 6201号室】

基本的スピーチレベルの切り替えに関する日韓対照研究
—大学生初対面場面をもとに—

金 兌妍

日本語の初対面会話における基本スピーチレベルの切り替えについて「最初は丁寧体を用い、丁寧体と普通体の混用が見え、徐々に普通体に移行している」とその方法が明らかになっている。しかし、韓国語母語話者間会話では初対面丁寧体から普通体に切り替える際、どのように基本スピーチレベルを切り替えているかについて明らかになっていない。

本論は大学生初対面場面の会話を分析し、日本語と韓国語においてそれぞれがどのように基本的スピーチレベルを切り替えているかについて共通点と相違点を述べるために書かれたものである。その方法を観察する際、一時的なスピーチレベルの変化ではなく、初対面会話の全体的スピーチレベルである基本的スピーチレベルの切り替えに注目して分析を行った。

<<口頭発表>> (3月10日 11:45-12:15)

【6号館2F 6201号室】

大阪と東京の雑談におけるあいづちの出現環境の異なり
—節境界を手掛かりとして—

太田 有紀

本稿は、大阪と東京の会話を特徴づける1つの要因としてあいづちを取り上げ、出現環境の異なりから聞き手と話し手の関わり方に地域差があることを明らかにした。

意味のまとまりという観点から、節境界直後とそれ以外に出現するあいづちを分類し考察したところ、東京では節境界後に、大阪では節境界以外であいづちが出現する傾向がある。

さらに、節境界以外に出現するあいづちの考察から、大阪では節境界よりも短い文節単位であいづちがうたれること、話し手が長音化や笑いをういて聞き手が反応しやすい状況を示していることが明らかとなった。また、副詞を使用することで話を聞き手に推測させつつ展開していく傾向がある。

一方東京では、動詞や形容詞、名詞等の述部要素を中心としてあいづちが出現している。さらに、語の途中で重複するようにあいづちが発話されており、予測や既知情報が確定した瞬間、反射的にあいづちをうつ傾向があると言える。

<<口頭発表>> (3月10日 12:20-12:50)

【6号館2F 6201号室】

談話実験における言語行動と非言語行動の相関関係
ービッグ・ストーリー確認作業を事例にー

砂川 千穂, 秦 かおり, 菊地 浩平

本研究の目的は、IT機器使用に関する談話実験で得られたデータを分析し、基盤形成プロセスにおける言語行動と非言語行動の相関関係を明らかにすることである。日常的な状況を含んだオリジナルのイラストを、2人1組のペアに並べ替えてストーリー作成を依頼した。参与者同士が作成したストーリーの構造を確認する場面を「ビッグ・ストーリー確認作業」と位置づけ、社会相互行為論的アプローチを用いてその語りを分析する。確認作業中の言語・非言語行動の分析から、タスクの達成は、カードを並べ終わった時点ではなく、参与者がその後の相互行為で微調整・交渉を行い、合意形成がなされた時であることが明らかになった。ビッグ・ストーリー確認作業において、どちらの参与者が語り、聞き手がどのようにその語りに介入していくのかを分析することは、異なる価値観、経験値、解釈を調整・交渉し、合意に至るプロセスを多角的に理解する上で重要である。

<<口頭発表>> (3月10日 10:00-10:30)

【6号館2F 6202号室】

相互行為資源としての「あの一」および「その一」

高木 智世, 森田 笑

日本語日常会話の録音・録画データ計30時間程度から、従来「フィラー」と呼ばれてきた「あの一」(約200例)と「その一」(約100事例)について、会話分析的視点からそれらがどのように相互行為の組織に用いられているかを分析した結果、「あの一」は直後に産出される行為や活動の性質を予示し、受け手に参加のあり方(参加の枠組み)の調整をガイドするものであるのに対し、「その一」は直後に産出される語句等の理解の仕方(理解の枠組み)をガイドするという点で、明確にその働きの次元が異なることが明らかになった。しかしながら、いずれも、その後に産出されることの性質を事前に示唆する働きがあり、次に産出される発話について見通しを与えることで間主観性を確立・維持して相互行為を順調に進行させようとする試みであり、とりわけ相互行為の順調な展開が懸念される事態においては、その解消のために有効な資源として利用可能なのである。

<<口頭発表>> (3月10日 10:35-11:05)

【6号館2F 6202号室】

小学校英語教育の授業内相互行為に関する質的研究

大塚 清高

本研究は、日本の小学校英語教育における授業内の教員と児童のやり取りを、会話分析の手法を用いて分析することで、相互行為上の特徴や、背景にある秩序などを明らかにしようとするものである。また、その分析結果から、小学校における英語の授業にとって有用な知見を引き出すことを目指している。用いたデータは公立小学校の実際の授業場面を録音あるいは録画したものであり、詳細なトランスクリプトを作成した上で、分析した。

分析の結果、一斉反復のやり取りの中でIRFサイクルが多く見出だされ、特に教員によるフォローアップが多様な役割を果たすことが確認された。このことから、こうしたやり取りを効果的に行うことで、授業の円滑な運営や、より望ましい学習環境を整備することにつながると示唆される。本研究での限られたデータの数から、結果の一般化には限界があるが、今後は事例数の増加や他教科との比較などを通じ、より精緻な分析が期待される。

<<口頭発表>> (3月10日 11:10-11:40)

【6号館2F 6202号室】

相互行為として目線の高さをあわせるということ
—子供を含む多人数会話でのしゃがみ込み／中腰の使い分けに着目して—

牧野 遼作, 坊農 真弓

他者と視線をあわせることは会話にとって重要な振る舞いである。大人と子供が含まれる会話において、背丈の低い子供に対して大人はしゃがむ、中腰になるといった様々なやり方で目線の高さをあわせる。本研究では子供を含めた多人数会話でのこうした振る舞いの事例分析を行った。分析より、多人数会話で身体を捻ることと同様に、主たる会話相手とそれ以外を示すためのやり方として、これらの振る舞いが使い分けられていることが示唆された。すなわち、しゃがみ込みながら子供の目線の高さにあわせることは、その子供は主たる会話の相手であることを示し、逆に大人は、主たる相手として会話を組み立てないことを示す。対して、中腰で子供の目線の高さにあわせることは、子供だけではなく、周囲の大人をも主たる会話相手として示す。以上のように、子供も含む多人数会話での姿勢の違いと会話の構造の関係の一端を明らかにした。

<<口頭発表>> (3月10日 11:45-12:15)

【6号館2F 6202号室】

相互行為の資源としての繰り返し
— 「からかい」を達成する場合—

呉 青青

リアルタイムに会話をしている会話者たちは、様々な資源を利用しながら、行為を達成している。本発表では、数ある資源のひとつである他者発話（身振り）の繰り返し（other-repetition）が「からかい」という行為を達成するための道具立てとして、どのように用いられるのかを、会話分析の手法を用いて明らかにする。また、繰り返しが用いられる「からかい」という行為の連鎖の特徴も記述したい。会話断片を分析した結果、以下のことが分かった。（1）相互行為の秩序を生成する上では言語のみならず身体が重要な働きを担っていると考えられる。（2）繰り返しは「からかい」を達成するための資源になるが、「共-成員性」へと振る舞いを方向づける手続きにもなりうる。（3）繰り返しが用いられる「からかい」の連鎖の中で、繰り返しは「からかい」の資源というより、【さらなる「からかい」】の資源ということのほうがもっと適正である。

<<口頭発表>> (3月10日 12:20-12:50)

【6号館2F 6202号室】

説明からの脱線と復帰
—化粧の行程を实践しながら説明する—

天谷 晴香

本研究は、説明の途中で別の話題に脱線し再び説明に復帰する際の、話題の脱線・復帰現象の特徴を捉えることを目的とする。

話題の脱線・復帰は、会話分析における「脇道連鎖side sequence」(Jefferson 1972)に相当する。脇道連鎖は2ターン程度の短い連鎖からひとつの話題が挿入される長い連鎖も指す。本研究で対象とする話題の脱線・復帰は、後者のような長い脇道連鎖に対応する。

また、話題の脱線・復帰は主軸となる話題がある場面において、よりその現象が際立つ。このことから、本研究では主題としての説明課題のある場面を用いる。

説明課題の途中で脱線した話題を行う時、説明課題の構造に影響しないタイミングをもって話題の脱線が行われていた。また、説明課題とそれ以外の話題の違いを示すために、説明課題の開始位置、つまり話題の復帰位置では敬体が使われていた。

<<口頭発表>> (3月10日 10:00-10:30)

【6号館2F 6203号室】

パプアニューギニアのアメレ語における呼称

野瀬 昌彦

ニューギニア島の東半分に位置するパプアニューギニアでは、多くの現地語が絶滅の危機に瀕していたり、文法や語彙の豊かさが失われていたりしている。本研究では、パプアニューギニアのマダン州で話される、ニューギニア系言語のアメレ語(Amele)を取り上げる。アメレ語の呼称表現に特に注目し、人の呼び方やあだ名など、人々の対人関係の語彙を調査した。同時に、トクピシンでの呼称も調査し、その影響や借用についても観察した。

以下の例(1)が、調査した結果の一部である（左から順に、アメレ語；トクピシン；日本語）

(1) 友人に呼びかけるとき：

Wari; frend (poro); (男でも女でも使用可能だが、主として男に対して) 友人

Aqa; susa; (女に対して) 友人

最後に、アメレ語では、伝統的な呼称語彙はかなり保持されている一方で、呼称の使い方とトクピシンとの使い分けをもって、敬意や人間関係の距離を調節していると主張する。

<<口頭発表>> (3月10日 10:35-11:05)

【6号館2F 6203号室】

話し手はどのように疑似独話を使うのか
—談話進行場面に見られる「なんか」の使用から—

杉崎 美生, 鹿野 浩子

会話の場面では「なんか、あれどこやったかな」のような、一見独り言と思われるような発話が、聞き手からの返答によってコミュニケーションを成立させることがある。本研究では、聞き手が存在する時に生じるこのような発話を疑似独話(野田2006)と定義し、その中で頻繁に用いられる「なんか」という語に着目し、その働きを分析した。紀行・バラエティ番組をデータとして分析を行った結果、話し手は目的地の選定や、次の行動の決定の場面で疑似独話を使用していることが明らかになった。また、①自問の形式によって、整理されていない情報や迷いがある状態を示す、②心内発話を使い、試行錯誤している様子を伝える、③感嘆詞や形容詞と共起し、主観的な感情を示す、などの働きが明らかとなった。話し手は疑似独話内において「なんか」を用いることで、語りを先導しながらも、その中で生じる迷いや計画性の無さに対して、聞き手に不確かさを示していると考えられる。

<<口頭発表>> (3月10日 11:10-11:40)

【6号館2F 6203号室】

語用論的選好からみた日本語文法
—名詞修飾「NのN」を中心として—

中村 真衣佳

日本語教育文法は、統語面に偏りがちであるが、実際の言語運用場面では、場面に適した日本語運用能力が求められている。そこで本研究は、名詞修飾を対象に語用論的選好から日本語文法を捉え分析し、運用面を重視した日本語文法を提案する一環として名詞修飾を扱う。名詞修飾の文法説明は、修飾要素が非修飾名詞の前方にくるとというのが一般的であるが、実際の運用場面では「これの青」「ボールペンの青」のような表現が使用され、文法規則との不整合がみられる。本研究では、有標的な主要部左方型「NのN」は、関係節の修飾を受ける際に、テンス制限が生じることを指摘し、主要部左方型名詞句の語用論的選好を解明する。そして、主要部左方型名詞句の使用運用は、聞き手と話し手に既知情報の共有があることが前提であることを提示する。本研究で得られる成果は、統語語用論文法として日本語教育への実用化が期待される。

<<口頭発表>> (3月10日 11:45-12:15)

【6号館2F 6203号室】

日本語の連体修飾構造からみた際立ちの社会性
—社会的要因を取り入れた認知言語学のアプローチ—

小松原 哲太

本発表では、日本語の連体修飾構造「XのY」の記述を行い、文法記述にマクロな社会的要因を取り入れる必要があることを主張する。「XのY」が「YのX」に反転できる場合、XとYの際立ちが均衡することが知られている。「新品のペットボトル」「ペットボトルの新品」のように、全体性は際立ちの均衡に関与する要因の1つであるが、他にどのような要因が関与するかは分かっていない。本研究の調査で、「大阪の食い倒れ」「食い倒れの大阪」, 「京都の伝統」「伝統の京都」, 「神戸の菓子」「菓子の神戸」のような用例が見つかった。これらの用例は、修飾構造を制約する際立ちの解釈に、文化と社会の要因が関与することを示唆している。この調査結果は、文法に反映された認知的解釈が社会的要因によって制約されていることを示しており、認知言語学的なアプローチに、社会的な次元を取り入れる必要があることを例証している。

<<口頭発表>> (3月10日 12:20-12:50)

【6号館2F 6203号室】

植物の描写におけるメタファーの役割
—ハリデーの枠組みから—

田丸 歩実

本研究の目的は、植物や風景などを描写するとき、メタファーがどのような役割を果たしているかを明らかにすることである。描写のレトリックとしては現前化の機能がよく指摘されるが、テキストが誰に対してまたどういった目的で書かれているかによって、描写の目的も異なると考えられる。本研究では、植物学会などによる科学的記述、種苗会社による商品カタログ、詩的なエッセイという異なるテキストを取り上げ、ハリデーの枠組みからそれぞれのテキストのフィールド・テナー・モードを記述した。その上で、それら状況のコンテキストがメタファーの使用にどのように反映されているかを分析した。その結果メタファーは、科学的言述では専門用語的な名付けによる談話コミュニティの形成、広告的言述では肯定的評価の付与、詩的言述では新たなものの見方の提示という異なる役割を果たしていることが示された。

<<口頭発表>> (3月10日 10:00-10:30)

【6号館2F 6204号室】

ライティングチュートリアルにおける沈黙の談話分析

葛岡 裕美, 藤井 聖子, 藤井 美咲

本研究はライティングチュートリアルにおける沈黙の分析を目的とする。書き手とチューター双方にとって第一言語である日本語での卒業論文執筆を目的とした、学部生と大学院生の間で行われたチュートリアル・セッションを談話データとし、沈黙が主に、(i) チューターの発問後に書き手が発問に返答するための思考に割かれたり、(ii) 問題点の探索に費やされたりすることを示す。さらに、沈黙の後にはしばしばチューターの発問に対する書き手の返答や返答を遅延する標識等が提示されること、また沈黙後チューターが発問をリフレーズすることにより書き手の返答が活性化することなどを示す。これらの分析から、チューターによる発問後に起こる沈黙をチューターが即座に破らず書き手の思考や発話を待つことや、チューターが発問をリフレーズすること等が、書き手自らによる問題点への見解や解決案等の提示につながることを示唆する。

<<口頭発表>> (3月10日 10:35-11:05)

【6号館2F 6204号室】

問題解決に非協力的な相手を説得する
—英語母語話者と学習者の話しことばコーパスの分析—

山本 綾

トラブルに見舞われたとき、解決のために他者に協力を求めたものの断られてしまうことがある。本研究ではこうした状況に着目し、(1) 英語母語話者がどのような言語方略を用いて相手に働きかけ、問題解決をはかるのか、(2) 日本語を母語とする英語学習者がその方略をどのように習得するのか、について調査した。資料は、The NICT JLE Corpus (日本人英語学習者および英語母語話者の話しことばコーパス) から抽出した、2つのシナリオに基づくロールプレイ104事例である。

調査の結果、英語母語話者は、「事態を詳細に説明する」「相手の不利益を示唆する」など6つの方略を用いることが明らかになった。学習者は、英語運用能力・中級以上からこうした方略の一部を用いるようになることがわかった。また、発話の形式を見ると、上級学習者とその他のレベルの学習者の間で事態の述べ方に異なる傾向が見られた。

<<口頭発表>> (3月10日 11:10-11:40)

【6号館2F 6204号室】

日本の職場における外国籍社員の言語選択
—日本語の言語機能とは—

ケッチャム 千香子

本研究は、日本の企業で言語環境が異なる職場で働く外国籍社員（以下、FB）11名にインタビューを実施し、FBが職場で日本語を使用する相手や場面、および日本語を使用するときの目的や意識を調べることにより、日本の職場での日本語の言語機能をFBの視点から多角的に分析し明らかにすることを目的とする。

近年、日本の職場では英語公用語化など英語を中心にした二言語や多言語環境の職場が増加傾向にあり、これは日本語によるコミュニケーションで苦勞するFBにとって朗報であると捉えられている。しかし英語公用語化が進む多言語職場でのFBの言語使用の実態を調査したところ、業務の効率性や職場内の対人関係を重視するFBが社内公用語に反して日本語を積極的に使用している事例が明らかになった。

本研究は、多言語環境が進む日本の職場における日本語の言語機能を示唆すると同時に、FBが能動的に日本語を選択する行動の背景にある意識についても考察を進める。

<<口頭発表>> (3月10日 11:45-12:15)

【6号館2F 6204号室】

リアルタイムアノテーションによる小学校におけるプレゼンテーション相互評価

森 篤嗣, 山口 昌也

本発表では、モバイルデバイス向けのWeb アプリケーションである“FishWatchr Mini”を使用し、小学校におけるリアルタイムアノテーションによるプレゼンテーションの相互評価の手法と振り返りの方法を提案し、授業実践例を報告する。

アクティブラーニングでは、各自の学習の成果をプレゼンテーションさせることも多い。しかし、小学校の授業における相互評価のもっとも一般的な挙手制度では、以下のような問題が生じる。

1. プレゼンテーションの評価が証拠に基づかず、印象評価に留まる可能性がある。
2. 評価をしたい（手を挙げて当ててもらいたい）児童の全員が発言できるとは限らない。

こうした問題を解消すべく、本発表では提案手法による授業実践をおこなった。提案手法による授業実践は①プレゼンテーションの録画、②学習者によるリアルタイムアノテーション、③①と②を同期させたデータを利用した振り返りを行うという点に特徴がある。

<<口頭発表>> (3月11日 14:30-15:00)

【6号館2F 6202号室】

日本語と韓国語における依頼表現のバリエーションの多様化の過程

辻岡 咲子

本発表では、日本語と韓国語の授受動詞による依頼表現の使用動態に関する調査に基づき、日韓両言語の配慮を必要とする言語形式の多様化の過程について考察するため、若年層と高年層に意識調査を行った。調査結果から、日本語と韓国語における、授受動詞による依頼表現の多様化の方向性の相違とその要因について述べると、日本語と韓国語では受納動詞の補助動詞用法の有無に加えて、それに後接する構文の違いと丁寧さの捉え方に違いがあることが明らかになった。日本語の場合、「聞き手の私的領域」鈴木(1989)を言及しない表現を丁寧な表現だと捉えることがあるため婉曲的な表現が拡張するが、韓国語にはその制限が無い「聞き手の私的領域」を直接言及する表現が多様になる。このことから、日本語と韓国語では「聞き手の私的領域」に踏み込む表現の捉え方に違いがあるため、依頼表現のバリエーションの多様化の方向性にも差異が生じているものと考えられる。

<<口頭発表>> (3月11日 15:05-15:35)

【6号館2F 6202号室】

“Tourism linguistics”のアプローチ
—観光パンフレットの日中英3言語対照から—

一木 有海

昨年、訪日外国人旅行者数は初めて2000万人を超えた。現在、政府は2020年4000万人を目指し、国をあげて「観光先進国」の実現に向けて取り組みが行われている。外国人旅行者を増やすために「言語サービス」、つまり多言語での標識、パンフレット、ホームページを充実させて外国人観光客の利便を図ることは、1つのキーワードとなる。そこで本研究では、“Tourism linguistics”のアプローチとして、日本の観光地のパンフレットやウェブサイトとその英語訳、中国語訳を調査することで、3言語の観光のナラティブにおける相違点を明らかにしたい。英語訳または中国語訳が逐語訳にされていない文を抽出したのち、表現の変化パターンを分析した結果、観光地側視点か観光客視点か、誘致の表現が状況説明的か観光客の参加前提的か、中国語“欢迎”が特有のふるまいを示すといった3つの傾向が現れた。

<<口頭発表>> (3月11日 15:40-16:10)

【6号館2F 6202号室】

韓国語における短縮パターンの特徴
—ドラマのタイトルを中心に—

金 廷珉, 秋葉 多佳子

近年, インターネットやSNSの普及によって短縮語の使用が顕著に見られるようになり, 単語のレベルだけではなく, 文や句の短縮表現も多く観察されている. しかしながら, 混成語や複合語の短縮形に関する先行研究に比べて, 文や句の短縮パターンについて論じた研究はあまり見られない. 本研究では韓国ドラマのタイトルを研究対象として, その短縮パターンの特徴を明らかにすることを目的とする. 具体的には, 韓国の放送局5社の2010年から2017年10月までの放映ドラマのタイトルを収集し, 短縮パターンを大きく7つに分類して分析を行った. その結果, 合計523個のタイトルのうち317個(約61%)が短縮されていることが分かった. また, 最も多く見られた上位3つのパターンは各要素から語頭の1音節ずつ結合>タイトルの前半(の一部)だけを残す>各要素から語頭・語末の1~2音節ずつ結合の順であった.

<<口頭発表>> (3月11日 14:30-15:00)

【6号館2F 6203号室】

言語政策としての経済連携協定
—エスノグラフィーの可能性—

大友 瑠璃子

本研究は、日本と東南アジア諸国の間に結ばれた経済連携協定を言語政策として位置づけた上で、移民労働者、受け入れ先施設の経営者、介護従事者、施設利用者など、様々な利害関係者によって、その言語政策が（再）作成・（再）解釈・実施されていったかの過程を記述をすることを目的とした。発表では、エスノグラフィー調査のデータを引用しながら、刻一刻と変化する介護現場のニーズや、地域の雇用状況に応じて変化する施設のビジネス・人材育成環境、利害関係者の雇用関係・人間関係に、施設における言語政策の運営が左右される様子を詳説する。発表の後半では、トップ・ダウン—ボトム・アップ、あるいはマクロ—ミクロという言語政策研究で頻繁に用いられるメタファーを批判的に論じ、言語政策を実行していく権威者(Johnson and Johnson 2015)の存在を明らかにし、その動きに着目することが言語政策の運営過程を記述する際の鍵になることを訴える。

<<口頭発表>> (3月11日 15:05-15:35)

【6号館2F 6203号室】

複言語国家ブータン王国における言語認識
—複言語話者の母語認識と自己認識—

佐藤 美奈子

本発表はヒマラヤの複言語国家ブータン王国における複言語話者の母語認識とその意味の解明を目的とする。「母語を定義することの重要性」を問い、習得順序、能力、心的態度など複数の母語基準を提唱するSkutnabb-Kangas (1981)と、言語の「優位性」に着目し「関係言語の相対的地位」に言及するU. ワインライヒ (1976) の理論を融合し、ブータンの学生497人、教師115人、一般人59家庭を対象に質問紙調査と面談調査をおこなった。その結果、複言語話者には、個人としての現在の能力、使用頻度から母語をとらえる傾向と、一個人ではなく「ブータン人」として国家アイデンティティである国語を自身の母語とする傾向の2つがみられた。また親が認識するわが子の母語にはわが子の言語継承に対する親の期待が反映されていた。

複言語話者にとって母語規定とは、複数の言語を用いる複合的な自己を規定することである。母語認識とはすなわち自己認識なのである

<<口頭発表>> (3月11日 15:40-16:10)

【6号館2F 6203号室】

国会では「手話」がどのように論じられてきたのか
—「国会会議録検索システム検索用API」を利用した経年的な考察—

岡田 祥平

近年、「手話」が「言語」であることを認めるいわゆる「手話言語条例」を制定する日本の地方自治体が増えるなど、「手話」は法律・条例の制定に関わる人々からも注目を集めていると考えられる。しかし、そもそも、これまで、「手話」が法律・条例の制定に関わる人々の間でどのように議論され、どのように位置付けられ、現在に至っているのか、その詳細は詳らかではない。そこで、その実態の一端を明らかにする試みとして、国会で「手話」という語がどのように取り上げられてきたのか、計量テキスト分析の手法を援用し、経年的に素描し、分析、考察を行った。その結果、国会の議論では、「手話」が手話通訳による聴覚障害者への情報保障の問題であるという点は一貫しているものの、時代を経るに連れて聴覚障害者への認識が変わる傾向や、「手話」を放送で使用する可能性を模索する視点から個人に対する支援の手段として捉える視点に変化する傾向が認められた。

<<口頭発表>> (3月11日 14:30-15:00)

【6号館2F 6204号室】

やりもらいの距離感と家族の変容
—育児体験ナラティブの分析から—

岡本 多香子, 井出 里咲子

本発表は日本人女性を対象とした育児体験談をデータに、授受表現と人称詞の使用の相違が映し出す家族観の違いについて考察するものである。発表では、国内3つの調査地で収集された世代と家族形態の異なる出産育児経験のある女性たちに対する半構造的インタビュー・ナラティブをもとに、語りに生じる「てくれる／てもらう表現」（以下、授受表現）、及び夫や家族に対して使用される人称詞に着目した分析を行う。分析では、それぞれの地域での語り手の使う授受表現と人称詞「うち」の使用域の異なりをもとに、語り手が語りを通して自分たちを取り巻く夫や親族といった家族をいかにカテゴリー化し、スタンスを表示するかを考察する。その上で家族の変容に伴う出産・育児への意識変化をことばがいかに指標するかを明るみにするとともに、世代を超えて伝播される日本人女性を取り巻く規範意識について考察する。

<<口頭発表>> (3月11日 15:05-15:35)

【6号館2F 6204号室】

語りにみる外国人妻のアイデンティとその表出
—在日モンゴル人女性を事例に—

Oyunaa Nomin

日本に住む外国人を「外国人」ということばで一括りに表現できる一方、その実態は多種多様である。本発表では日本人男性を配偶者に持つモンゴル出身女性たちを対象に、彼女らの長年の日本生活体験の実態について語り・ナラティブに生起するアイデンティティとの関連で明らかにする。これによって、日本社会における少数派民族、中でも人数の少なさからマイノリティの中のマイノリティと位置づけられる者たちの多様な実態を訴え、多文化共生社会としての現代社会におけるマジョリティとマイノリティ間のさらなる理解を促したい。

本発表では社会言語学的視座(De Fina & Georgakopoulou, 2012)に立ち、関西と関東地域に住む9人のモンゴル人女性を対象に行ったインタビュー調査の結果、特に特徴的な点である、研究協力者たちの顔立ち及び「見た目」といった外見的な要素が研究協力者たちの日頃の生活全般にわたり影響を与えている点について詳察する。

<<口頭発表>> (3月11日 15:40-16:10)

【6号館2F 6204号室】

日本語のナラティブにおける評価構造の特徴と機能について

陳 真

評価構造は発話内容に対して話し手の気持ちや観点を表すもの (Labov, 1972) として、ナラティブでは重要な位置を占めている (Peterson & McCabe, 1983) . しかし、学習者が一まとまりの発話を行うとき、評価構造の使用が適切ではないという問題が報告された (Kang, 2003) . また、学習者が評価構造を適切に使用できない原因を探るために、母語話者の評価構造の使用状況を明らかにする必要がある。日本語のナラティブにおける評価構造について、先行研究は主に英語のナラティブにおける評価構造の分類を枠組みとして分析しているため、十分とは言えない。さらに、評価表現の特徴と評価構造の機能については、まだ解明されていないことが多いと言える。そこで、本発表は日本語母語話者から産出されたナラティブにおける評価構造の分類を分析した上で、具体的な評価表現の特徴、そしてナラティブの内容に対して、評価構造が持っている機能を考察していく。